

コミュニティ・レジリエンスからみる地域の伝統文化の継承：旧根尾村を事例として

金山 智子 (情報科学芸術大学院大学)

Keyword： コミュニティ・レジリエンス、伝統文化、文化継承、少子高齢化

【研究背景】

現代社会の複雑さ、相互依存性、不安定性に対応する力としてのレジリエンスは、復元力、回復力、強靱力、弾力性などと解釈されるが、主に「外部から力を加えられた物質が元の状態に戻る力」と「人が困難から立ち直る力」という意味とされている(ゾッリ&ヒーラー, 2013)。

その流れから、災害など様々な脅威が増す現代社会において、ダメージを受けたコミュニティを維持、再生していくための「コミュニティ・レジリエンス」が重視されている。コミュニティ・レジリエンスとは、「コミュニティがストレスに耐え、変化にポジティブに対応していく能力を示す複雑で多面的かつ多層的なプロセス」と言及され、弾力力や回復力という能力より、コミュニティが変化していくプロセスが重要であることが示唆されている(Wickes et al., 2010)。

人口減少や少子高齢化、地方経済や文化の衰退など様々な課題へ対応や変革を迫られる地域コミュニティがどのように耐え、また対応していったのかという視点からコミュニティを理解・評価するため、災害復興や地域開発などを中心にコミュニティ・レジリエンス研究が行われてきた。近年では文化人類学(奈良&稲村, 2018)や文化伝承(Beel, et. al, 2017)、コミュニティの持続可能性(Magis, 2010)など多様な視点で研究が進められており、外部要因に対するコミュニティの反応(リアクティブバウンスバック)の分析を主流とする研究に対し、文化などの視点からみていくとする新しい研究では、事前に人が判断や選択していく能力(プロアクティブヒューマンエージェンシー)を重視、これに基づいたコミュニティ・レジリエンスの概念構築の必要性が指摘されている(Magis, 2010; Skerratt, 2013)。Beelらは(2017)、これまで文化と文化活動が実践を通してレジリエンス的な行動を生み出すという考え方にほとんど関与してこなかったこと、そして、レジリエンスをコミュニティの文化活動から考察することの必要性について論じている。

【研究課題と調査方法】

本研究では、「コミュニティ・レジリエンスは、いかにコミュニティの文化・文化活動から創出されるのか」という

研究課題のもと、伝統文化継承活動のプロセスから地域文化とコミュニティ・レジリエンスの関係について考察する。

本研究の事例対象は岐阜県本巣市根尾の能郷集落の能・狂言とした。600年の歴史を誇る能郷の能・狂言は長い時間の中で、衰退、断絶、復活を経て、現在継承されている。元来は世襲制により継承されていたが、現在世襲制は崩壊、模索しながら継承を続けている。1960～2000年頃までの継承活動に関しては、福田(2004)が文化財保護政策の点から能郷の能・狂言について調査しており、本研究では、福田の調査を参照しつつ、2000年から現在までの能郷の能・狂言について考察する。

調査は、2016年から2018年まで毎年4月13日に行われる能狂言と事前練習への継続的な参与観察、能狂言の関係者(元根尾村長、保存会会長、保存会メンバー、集落女性など)へのインタビュー(2019年)、および、保存会の資料の分析を行った。

【分析結果】

(1) 能郷の能・狂言の概要

能郷は四方を千メートル級の山々に囲まれ、集落の中央に氏神白山神社が鎮座する。717年に泰澄法師が開基したと伝えられる奥の院は、福井県境の能郷白山頂上(1617m)にある。能郷の能・狂言は、白山神社の祭礼として能郷地区(旧能郷村)の16戸の氏子(猿楽衆)より奉納される神事芸能である(写真1&2)。能方・狂言方・囃子方と役割が世襲で受け継がれてきた。わずかに残された史料や能面の作製時期から、600年ほどの歴史があると考えられている。



写真1 能の舞台(筆者撮影)



写真2 狂言の舞台（筆者撮影）

明治以降、衰退し、戦後途絶えていたが、1955年に京都大学教授猪熊兼繁に発見され、1958年に岐阜県から無形文化財の指定を受けた。これまで能郷でひっそり行われてきた芸能は、研究者の来訪、外部公演、文化財指定などで脚光を浴び、復活した。1960年代には保存会結成や保護体制が整備され、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定された。一方、若者の流出などによる後継者不足は深刻化し、今後の継承のために、能郷地区全域や他の地域に住む能郷出身者に門戸が拡大された。

このような経緯について、福田は「村内で継承の方策が議論されるより先に、文化財指定による継承の『義務』が先行されたため、継承に伴う問題の根本的な解決が図られることがなく、現在も多くの問題が未解決なままである」と述べている（2003, 26）。

(2) 「地域つながり」へこだわりと参加者間の差異

能の能・狂言が復活して、すでに60年以上が経つ。外部評価により、かつて「集落内での神事」は「残すべき文化財」へ価値評価が変わっていった。一方、少子高齢化や若者流出の加速により、能郷集落の住民は現在32世帯53名（2019年6月）と、高齢者の単身世帯の多い典型的な限界集落となり、文化財の継承がかなり厳しい状況にある。

1970年代後半頃から、完全な世襲制が困難となり当時能郷地区45戸の全てに門戸が拡大されたが、長い時代、厳格に世襲制度を守り、それが地区において一つの格式あるいは猿楽衆という特別な存在や力をもっていたことから、そこから排除されてきた地区の人たちの中には複雑な想いもあり、「全戸をあげて協力する」という意識や機運にはなりにくかった。また、高齢化が進み、若手への継承が必要であることから、2000年には、初めて能郷地区外の住民や岐阜市など近隣市町村に住む能郷出身者も保存会会員として受け入れ、継承保存を図った。特に、当時の村長から、根尾村役場の若手職員3名に声がかかり、会員となった。3

名とも大井、板所、長島と別の集落に住民であり、保存会の会員たちは、「根尾に住んでいるし、役場の人だから」と、自分たちで納得し、外部にその点を伝えている。2001年に米国ワシントンDCにて開催されたワシントン桜祭りにて、岐阜県として参加、能郷の能・狂言公演を行なったが、新しい会員もそこに参加した。

能郷地区外から参加した3名の若手のうち2名は「続けて行くのは大変」「自治消防団などと重なる」「4月は仕事始めでスケジュールが厳しい」などの理由で、数年内に辞退した。保存会の人たちは、「折角教えたのに」「しばらくは入れない」と期待が大きかった反面、否定的感情がおきた。このように、慣習に捉われない新しい制度の導入に関して、ネガティブな印象となり、積極的に声を掛けない状態が続いていった。一方、残った1名の役場職員は「親切に教えて頂いたし、一旦引き受けた以上途中でやめるはよくない」と現在も継続しており、外部からの受け入れでは、彼のように「続けてくれる人」が求められるようになった。

2010年頃、能郷白山神社の神主そして若手の神主に、「能郷の神主だから」「根尾の神主だから」という理由で声が掛かった。神主の一人は「狂言が面白そうだから参加したけど、10年続けるとは思わなかった」と話しているが、二人とも現在まで続けている。また、2013年から本巣市で地域おこし協力隊制度を開始し、根尾にも地域おこし協力隊が入ってくるようになった。2018年に、その一人に声が掛かり会員となったが、「根尾の地域おこし協力隊でみんな知っているし、楽器もできる」というのが理由であった。

外部に門戸を開きながらも、「隣の集落だから」「お祭りが同じ日だから」など、どこかに「自分たちと地域つながり」であることを拠り所にして納得していることが分かる。能郷地区全戸に門戸を開いた際には、「能郷とのつながり」が重要であり、能郷地区外に拡張していった際には、「根尾の人たちが知っている」「根尾の子だから」など「根尾とのつながり」が重視されていった。

こういった地域のつながりへのこだわりは、一方で世襲制とは異なる参加者間の差異を生むことにつながる。これまでの「世襲する人」「しない人」という地区内での差異ではなく、「猿楽衆」「能郷地区住民」「能郷出身者」「根尾関係者」といった保存会内部での異なる層である（図1参照）。

こういった参加者間の違いは、保存会での意見や発言となって表れる。能郷地区外からのある参加者は、「能郷の人が主になるように、自分が前にできることは控えている。能郷の人たちにもプライドがあるので、自分の立ち位置は考えている」と参加している時の意識や態度について話して

いた。長年参加をしても、「能郷の人か否か」という点については変わらない。



図1 能・狂言の継続を担う人たちの層

そして、これは能・狂言の保存に関しても意見の違いとなる。猿楽衆の人たちは、神事芸能としての継続、長く継続できる人への参加、つながりの維持を望む。一方、能郷地区外に住む能郷出身者や根尾関係者は、つながりの希薄化よりもやりたい人がやっていたりする仕組み、演目の削減、他の文化財との差別化、中学生など子どもへの伝承と、継続のために新たな取り組みが必要であると考えている。猿楽衆とその他の人たちの意見や感情的な差異は、今後伝承をどのようにしていくのかの議論へと展開させていくことの障害にもなっている。

(3) 生活スタイルの変容と神事芸能の型化

能郷の能・狂言は毎年4月13日に白山神社の奉納神事として行われる。その準備として、3月に演目や練習方法を定める「きりこみ」と呼ばれる会合を全会員が集まって行う。その後、連夜練習を重ね、当日を迎える。神事後には反省会を行ない終了となる。これまで踏襲してきたこのやり方も、生活スタイルの変化や能郷区外の参加者の増加によって変化していった。例えば、「きりこみ」は現在も実施されているが、奉納終了後の反省会はなくなった。

能郷の能は、舞に謡や囃子を合わせる。ゆえに、稽古でいかに合わせていくかは不可欠だが、先に述べた理由から、夜の練習に全員が揃うことは現状難しい。実際、本番前日ようやく全員が揃って稽古できたこともあった。能の能・狂言は男性のみが演ずる芸能であり、仕事に従事している参加者にとっては、数週間とはいえ、稽古は負担となる。特に、岐阜市や本巣市南部に住んでいる会員は夜7時からの稽古に出ることは楽ではない(写真3&4)。

かつては、猿楽衆の各家で稽古が行われた。稽古はかなり厳しいものであったと、父親が家で指導していたことを記憶する住民が語っていたが、厳しい稽古ゆえ、「しっかり覚え忘れない」芸となった。芸は他人の芸を見て覚えるも

のであったが、現在は保存会が作った本を見ながら覚えていく。能郷地区外からの参加者たちは、通勤や移動の車中でカセットテープを使って練習し、家ではビデオテープを見ながら練習したと話す。



写真3 能の練習風景(筆者撮影)



写真4 狂言の練習風景(筆者撮影)

このような稽古では、芸を「しっかり覚える」までいかず、「とりあえず覚える」ことが目標となっていく。このような現状で、能・狂言を「まねごと」と表現するものもいた。かつては、扇子をもった手の形で異なる意味を表現するほど細かな芸能であるが、現在はとりあえず一つの型として覚えるのが精一杯な状況なのである。

会員減少に伴い、これまでならば現役を引退して指導役を担っていた年の会員たちも、80歳を越えても引退できず、役者と指導者を兼任する。「自分たちの前の代なら指導しているのに、自分はまだ現役で、自分でも思うようにできないのに」という会員もいるが、長年演じていても、高齢になり不安になるのは当然である。さらに、現在神事芸能は観客の前で行うため、「失敗は村の人ばかりだったら大爆笑だった。今は観光客が主だから失敗が怖くなった」と話すものもいた。神事であっても実際には多くの客に向けて行っており、客の入り気がなくなって見に行くものもある。

外部評価や芸能保存目的で、様々な地域で公演依頼されるようになったが、イベント化された神事芸能にも練習は

必要であり、芸能としての公演は演者のプレッシャーをさらに高める。外部公演は一般の認知を高める一方、演者達の負担も大きくなるというジレンマを抱えている。

【考察】

最後に、コミュニティ・レジリエンス・モデル(The Canadian Centre for Community Renewal, 2000)をベースに人、組織、資源、コミュニティプロセスの四つの面から、能郷の能・狂言の神事芸能の伝統活動によるコミュニティ・レジリエンスについて順に考察していく。

第一に、コミュニティの人が新しいアイデアや選択に対していかにオープンな態度や行動をとるかでコミュニティ・レジリエンスがわかる。特に、「できる」というプロアクティブな態度や行動は重要だが、能郷の能・狂言は、逆に、問題に直面してから行動するリアクティブバウンズバックであった。それでも能郷地区外からの参加者が加わり、多様な意見をもつ人たちが増えていることから、今後プロアクティブな行動が期待できる。

第二に、組織に関してだが、社会変化の中で必要なリーダーシップややるべきことを実行するための資源を提供する能力が求められる。保存会や教育委員会などの組織に関しては、外部変化に対して「仕方がない」のでやるといった態度が強いが、個人の多様性が高まることで、組織についても、今後は変わって行く可能性がある。

第三に、目的達成のためにコミュニティ内部にある資源を土台にししながら、外部にある適切な資源を探していくことがコミュニティ・レジリエンスにつながる。能郷の能・狂言に関しては、伝承する人が最も重要な資源であり、いかに根尾関係者あるいは根尾外に継承者を発掘・教育していくかが重要となるであろう。

第四に、将来に向けてビジョンをシェアし、リサーチと分析から戦略的に計画し、その目的に向かっていくコミュニティプロセスが最も重要となる。福田の調査から16年経った現在も、状況はあまり変わっていないことが明らかになった。したがって、戦略的に考え、参加し、行動していくコミュニティ・レジリエンス力があるとはいえない。

それでも今回の分析から、地域コミュニティで伝統文化を価値のある文化として将来どのように伝承していくかという課題に対し、少しずつではあるが、新しい人材と取り入れることを契機として保存会や猿楽衆の人たちの態度や行動に変化が起きていることが確認された(図2参照)。

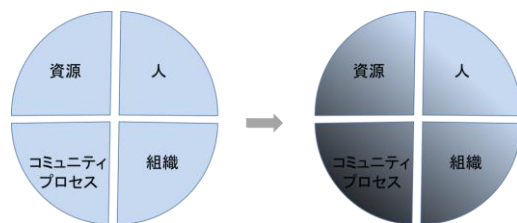


図2 コミュニティ・レジリエンスの変化

ゾッリら(2013)が指摘するように、個人の柔軟な考え方や態度、多様性のある組織、そして状況をホーリスティックに把握しながらリードできる通訳的リーダーが求められる。仕組みのモジュール化や文化のアーカイブ化も検討されるべきであり、能郷の能・狂言によるコミュニティ・レジリエンスは今後もっと高めていくことが可能であろう。

【引用・参考文献】

- Beel, D. E., Wallace, C. D., Webster, G., Nguyen, H., Tait, E., Macleod, M. Mellish, C. (2017). Cultural resilience: The production of rural community heritage, digital archives and the role of volunteers. *Journal of Rural Studies*. 54: 459-468.
- 福田裕美 (2003). 文化財政策における民俗芸能の継承にかかわる課題についての研究—「大江の幸若舞」「水海の田楽能舞」「能郷の能・狂言」を事例として—. *文化経済学* 4(1): 19-30.
- Magis K. (2010). Community resilience: An indicator of social sustainability. *Society and Natural Resources* 23: 401-416.
- 奈良由美子・稲村哲也 (2018). レジリエンスの諸相—人類史的視点からの挑戦— 放送大学教育振興会
- Skerratt, S. (2013). Enhancing the Analysis of Rural Community Resilience: Evidence from Community land Ownership. *Journal of Rural Studies*, 31: 36-46.
- The Canadian Centre for Community Renewal (2000). *The Community Resilience Manual*. Canadian Centre for Community Renewal.
- Wickes, R., Zahnow, R, & Mazerolle, L. (2010). *Community Resilience Research: Current Approaches, Challenges and Opportunities*, Institute for Social Science Research, The University of Queensland.
- ゾッリ, A., & ヒーリー, A. M. (2013). レジリエンス 復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か—ダイヤモンド社